変わる日本の「暮らし」と「まち」

no.51

震災を機に居住者が団結 絆を強めた2つの団地ストーリー

熊本県熊本市健軍・世安町団地（2016年◆平成28年）

阿部民子
Abe Tamiko
illustration：Shigeyuki Sakata

4月14日から震度7クラスの地震が連発、熊本や大分などに甚大な被害をもたらした「平成28年熊本地震」。最初の揺れが襲ったのは、14日の午後9時26分。島津眞由美さんは、熊本市動植物園にほど近い熊本市東区健軍（けんぐん）団地5階の一室で、夕食も風呂も終え、寛いでいたところだった。

「あまりに突然でその瞬間のことは覚えていないのですが、気づいたら高さ180センチの本棚が倒れ、食器棚から食器が落ちて床に散乱していました。団地の管理連絡員をしていますので、急いで外に出ようと思ったのですが、窓の外ですごい雨音がするんです。とっさに傘を持って階下に降りたら、下にいた人が『雨、降っていませんよ』って。ふと上を見たら、屋上にある高置水槽が破損して、水があふれていたんです」

島津さんは、急いで高齢者宅などを回って安否確認と避難誘導を行い、部屋に戻ると、既に貸主であるUR都市機構の九州支社住宅経営部団地マネージャー中村直寿から留守電が入っていた。すぐに折り返し、「状況を教えてほしい」との声に、動転しながらも破損した高置水槽の様子などを報告した。

同時刻、健軍団地の現地管理を担う明和不動産管理の森田健一さんは帰宅途中、揺れる車中で、けたたましく鳴る携帯をとった。

「地震発生から、わずか7分後のことでした。URの管理企画チームからの電話で『現地を確認してほしい』との要請だったんです。自宅までもう少しのところまで来ていましたが、急きょUターンして団地に戻りました」

健軍団地のほかに担当している熊本市中央区の世安（よやす）町団地（後述）も見回り、車中で夜を明かした。翌15日朝、現地に出向くと、ほどなく福岡から駆けつけたUR職員と業者が復旧工事を開始、そのスピードには驚いたという。

第一陣として初期対応にあたったUR職員4人のうちの1人、UR都市機構九州支社住宅経営部ストック技術チーム主幹の中西基は当時の状況を語る。

「第一報を受けてすぐ現地に被害状況を確認し、どういう職種の人間が必要かの選定を行って、15日の早朝に現地に向かいました。途中、高速道路が閉鎖になっているなどで、通常より倍以上の5時間近くかかりましたね」

断水で考えうる状況に対応できる準備

同行した設備技術チーム主幹の添田英彦は「福岡を出発するときにわかっていたのは、健軍団地の高置水槽破損による断水と、世安町団地の建物の破損ということだけ。詳しい状況がわからないので、とにかく断水の復旧に対応できる準備をして出発しました」と回想する。

4人は途中、九州支社で組織された災害対策本部と頻繁に連絡をとりながら工具類などを調達、現地に到着するやいなや、点検と復旧作業を開始。高置水槽が破損して上に汲み上げられなくなり地下貯水槽に貯まっていた100トンほどの水を、急きょ別経路で全戸に給水する手立てを考案。また、福岡出発時に手配していた飲料用の給水パックの配給も実施。取り急ぎ、断水はみごとに解消した。

すべての点検や断水の応急復旧工事がその日のうちに終わらなかったので、福岡県との県境にあるホテルに宿泊するために帰途に就いたのが15日の夜中。その段階では、これは未だ「前震」であり、さらなる「本震」が襲うことになろうとは、誰もが知るよしもなかった。

14日の揺れのあと、さらなる大きな揺れが人々を襲ったのが、16日午前1時25分。これが「本震」だった。熊本駅に近い、世安町団地8階に住む団地自治会長山本洋喜さんは、揺れてすぐに「これが本物だ！」と直感した。

高置水槽が破損した健軍団地［写真上］と揺れが大きかった高層階のある世安町団地

「ベッドで寝ていたんですが、トランポリンのように、体が上下に飛び跳ねました。すぐに停電になり、真っ暗な中で家具などがバラバラと倒れるのを、サラウンドで感じました」。強い揺れは、なんと10分近くも続いたという。

災害を機に、団地が二つになった

4階に住む自治会副会長の坂本朝子さんは、その瞬間、部屋中のあらゆるものがスローモーションのように自らを襲い、気づいたら本棚の下敷きになっていた。

「これは悪夢だと思いつつ、なんとか這い出さなきゃ、と思いました。そのとき、普段は挨拶もしない方が『坂本さん、大丈夫ですか』と助けに来てくれたんです。余震が続く停電の中、何人かの男性が自主的に巡回して、閉じ込められた人やけが人を救助していたんですね。これには感動しました」

揺れがおさまると、山本さんら自治会メンバーが中心となって、中庭から部屋番号を呼ぶなどして安否を確認。自家用車のある人がけが人を病院に運ぶなど、自主的に助け合いの和が生まれた。14日から開放してあった集会所には、部屋が散乱して入れない人や不安を感じた人などが集まり、身を寄せ合って余震が続く夜を過ごした。

16日早朝、すぐに姿を見せたのは、前述の中西を始めとする4人のUR職員だった。そのときの状況を、中西は「世安町団地では壁が落下するなど、緊迫感が高まっていました。廊下やバルコニーなどを端から端まで点検、倒壊の危険がないことを張り紙で通知しました。とにかく、団地住民を守ることで精いっぱいでしたね」と語る。UR職員らは、部屋に通電して避難者に開放するほか、部屋に閉じ込められた人の救助や簡易トイレの設置、自治会と協力して給水パックを配布しながらの安否確認などに駆け回った。「まずは飲料水が必要。そして簡易トイレなど、それぞれの職員が、東北や中越などの震災対応の経験があったのが、ここで生きたのかもしれません」と振り返る。

多くの困難を乗り越え、2か月たった現在、両団地はようやく落ち着きを取り戻しつつある。世安町団地自治会副会長の福島秀子さんは「最初の救出作戦と、そのあとのごみ分別など、みなが周りを気遣いながら自主的に動きました。忘れられない出来事です」

管理連絡員の藤本羊子さんも「団地が一つになった感覚でしたね」と言葉を添える。健軍団地の島津さんは、「15日、すぐにURの方がいらして安全を確認し、水道の修理に水や簡易トイレの提供などスピーディに対応してくださった。ここに住んでいて、本当によかったと思いました」と語る。

2つの団地復旧に尽力したURは、現在まで被災地へ延べ97人の職員を派遣。宅地や建物の危険度判定支援や被災者へのUR賃貸住宅の貸与、仮設住宅の建設支援も行う。熊本の一日も早い復興へと、懸命な作業は今日も続いている。

街に、ルネッサンス
UR
UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

［企画制作］新潮社